

浪江の こころ通信

・第15号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先が見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

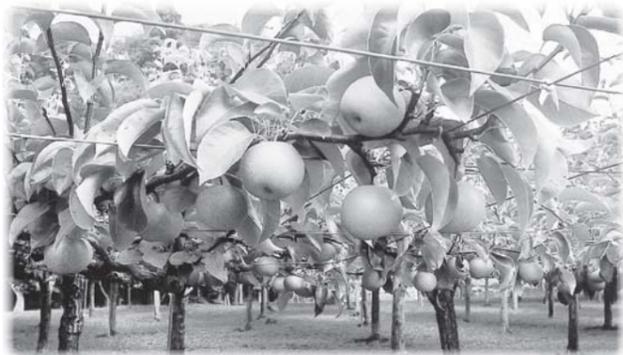
こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信」第15号への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1
男女共生センター内 浪江町役場二本松事務所
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4261



たべものづくりのQ&A 放射能

福島県発行 たべものづくりの放射能より抜粋

Q 井戸水は安心ですか。

A 井戸水は一般的に地表に降った雨が時間をかけて浸透しながら、自然にろ過されて地下水となったものであり、また、雨水や異物の混入を防止するため、通常はフタなどが設置されていることから、今度の事故の影響はないと考えられます。

県内の井戸水の分析結果は、放射性ヨウ素・セシウムともに検出されていません。

県のホームページでもモニタリング検査の結果を公表していますので、ご確認ください。

Q 線量が高い地域に実家があります。水道がなく、井戸水なのでお風呂に入るのもためられます。

A 井戸水からの検出はありませんので、お風呂に利用しても外部被ばくにはなりません。

Q 家で井戸水を使っていますが、雨水などが地中深くまで浸透した数年後の方が放射性物質を多く含んでしまうのではないですか。

A 現在、放射性セシウムは土壌と強く結合していて、地表近くに存在しています。

福島県では、その地表をはじめとした除染作業を進めています。

地下水についても定期的に測定を行って、結果を公表していきます。

Q 洗濯をすると放射性物質はどうなりますか。

A 放射性物質はほとんど洗い流されます。また、汚れた衣服と一緒に洗濯しても、別の衣服には移りません。

元気つく場でおしゃべりしましょ 参加無料 ～つくば市・浪江町避難者の集い～

つくば市ならびに近隣の市町村へ避難の町民の皆さまとともに過ごし、少しでも明るい話題で語らうことができるようにとしゃべり場を開催いたします。

郷土の誉れの原田直之さんの清々しい歌声に心を和ませて、お互いに元気をもらうことができるひとときを過ごしましょう。

近隣に限らず、東京をはじめとした関東圏、福島県内に避難の方でも、お越しいただける方は、どなたでも大歓迎です。

車でも、電車でもアクセス可能ですので、皆さまのお越しをお待ちしています。

■開催日 9月22日(祝)

■場所 筑波学院大学 構内
(茨城県つくば市吾妻3丁目1番地)

■プログラム

- 10時 受付開始
- 10時30分 しゃべり場、会からのお知らせ、その他情報連絡
- 12時 昼食(ご用意します。)
- 13時 セレモニー
つくば市長、浪江町長あいさつ ほか
- 13時40分 コンサート
原田直之さん(浪江出身民謡歌手)
- 14時40分 しゃべり場に戻ったのち、
- 15時30分 閉会

■駐車場台数 300台 無料

■アクセス

- つくばエクスプレス(快速)で秋葉原駅から45分
つくば駅下車(A2出口)徒歩7分
- JR常磐線土浦駅下車、西口(バスのりば2番)から 関東鉄道バス筑波大学中央行き約30分で筑波大学春日キャンパス下車
- JR常磐線ひたち野うしく駅下車、東口(バスのりば1番)から 関東鉄道バス筑波大学中央行き約30分で筑波大学春日キャンパス下車
または、JRバスつくばセンター行き約20分
つくばセンター下車徒歩7分
- 自家用車でお越しの方 桜・土浦ICから10分



主催 元気つく場会 問 元気つく場会 代表 古場 TEL 090-7790-9574・090-7076-2374



群馬県

江井 美穂さん(井手)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井
取材日：7月28日

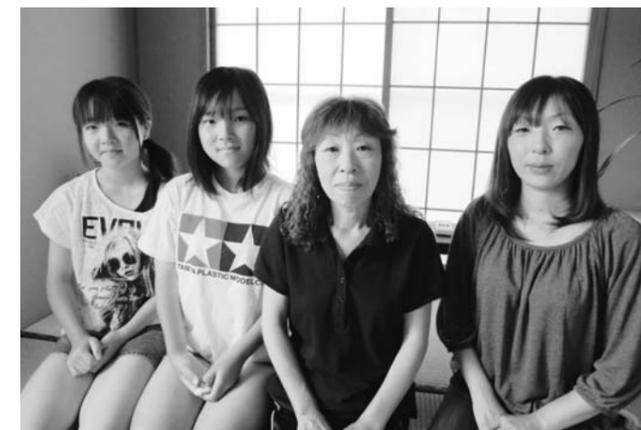
いまの生活を少しでも前に進めたい —「帰りたいけど帰れない」長く続く戸惑いの時間—

江井美穂さんは、長女の蘭夢さん(中学3年)、次女の愛蘭さん(中学1年)、そして母親の鈴木久美子さんと4人で群馬県高崎市にある借り上げアパートで生活しています。単身赴任で福島県内に勤める夫の満さんとは、離れたままの暮らしが続いています。

地震の直後は、防災無線が聞こえなかったこともあり、周囲の方々よりも避難が少し遅れました。気づいたころには津島への道が大渋滞だったので小高区に避難しました。その後、私たち家族6人は相馬市にいる弟家族7人と合流して、妹夫婦の実家のある群馬県東吾妻町に避難し、3月下旬に現在の借り上げアパートに移ってきました。群馬に来てからは、地域の方や大学関係の方にも大変良くしていただき、ありがたい気持ちです。今気がかりなことの一つは、福島に仕事がある夫と離れたままの暮らしが続いていることです。群馬と福島を往復する時間と経費はかなり負担が大きいです。

もう一つ気がかりなことは、娘たちの高校進学のことです。福島県内に進学すべきか、県外にすべきなのか悩みます。娘たちは、現在の学校でも楽しく過ごしていますが、やっぱり浪江に帰りたいと言っています。私も同じ気持ちですが、放射線のことを考えると「帰りたいけど帰れない」という戸惑いに

悩まされます。そんな中、この3月に一緒に生活していた祖母が突然亡くなりました。とても健康だった祖母でしたが、あまりの生活環境の変化に苦しかったのだと思います。浪江にいたころのように、広い家の中でんびりしたり、農作業をしたり、ご近所の方とお茶を飲んだりしていた生活が一変しました。私自身も今は仕事をしていないこともあり、友人も近くにはいませんので、一人でいる時間が多くなっているなと思います。とにかく現在の生活をどうにか前に進めたい。そう強く思います。



▲(左から) 蘭夢さん、愛蘭さん、久美子さん、美穂さん

合ったり、ご近所で助け合って暮らしていたことに気づかされます。そんな暮らしがもうできなくなるのかと思うと寂しいです。でも、ふり返ってばかりもいられません。やはり自分たちのこれからは自分で決めなければならぬのだと思います。それぞれが前を向いて、一日も早く元気な姿で皆さんにお会いしたいです。



栃木県

松田 宏一さん(谷津田)

取材者：(特活)とちぎボランティアネットワーク 徳山
取材日：7月22日

浪江町の谷津田から栃木県真岡市に避難生活をしている松田宏一さん。震災が発生してから千葉県や茨城県での一時的な避難生活を経て、昨年9月から栃木県真岡市の住居で現在に至っています。

仕事の都合上単身赴任で週末にしか家にいる時間はありませんが、奥さんの泰子さん7歳の長男を頭に元気な男の子が3人いて、とてもにぎやかな家庭です。



▲元気なお子さんたちと一緒に。一番左が宏一さん。

震災が発生した翌日の朝、避難指示がでました。地元の消防団に入っていたので地域住民の避難を促す活動をしました。避難することに理解してくれない住民もいて説得をしたりしました。私も自分を含めて10人の家族がいて、しかも祖父は寝たきり状態ということもあり、自分の家族の心配と消防団の役目との板挟みの中の避難活動となりました。

とりあえず妻の実家のある昼曾根へ避難しました。しかし、その場所も避難地域となり本宮市の本宮高校体育館へ避難しました。その場所も一泊しかしませんでした。老人ホームから避難している人たちに避難移動中の祖父のケア方法を教わり助けられました。

親戚を頼り千葉県に避難しましたが夫婦共働きということもあり、お互いに仕事を継続するのに有効な場所を選び栃木県真岡市に落ち着き現在に至っています。

ここは浪江から避難してきている人も近所について、知らない町に家族が孤立することもありませんし、子どももまだ小さいので地域に溶け込むことができているようです。震災前に同居していた祖父母と両親も近所に住んでいましたが、祖父は浪江に帰ることが叶わず今年の4月に亡くなりました。

避難生活も長期になってくると、子どものこと、家族のことを考えるとどのように生活していくのかと非常に悩みます。いつ浪江に帰れるようになるのかわかりませんが、震災前の環境や住民が元通りになるのであれば、またあの浪江での生活を取り戻したいと思っています。



畠山佳代子さん(川添)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会アミル 柴田
取材日：8月5日

浪江に帰れるまで、山形で頑張ります



▲笑顔がすてきな佳代子さん。
現在お住まいのアパートの前で

川添でご家族で農業を営んでいた畠山さんご一家は現在、夫の行男さん、佳代子さん、祖母永子^{なが}さん、長男敦くん、次男暁^{あき}くんの5人で山形県寒河江市のアパートで暮らしています。長女朋子さんは、今年の春から専門学校に進学し、仙台で一人暮らしを始めたそうです。

私の家ではいちごを作っていて、避難指示が出た12日の朝も市場への出荷の準備をしていました。避難後、避難所を転々しましたが、友人の家にも泊めていただいた後、寒河江市にいる私の妹が山形に来たらと言ってくれて、2、3日世話になるつもりでこちらにきました。ですが、爆発のニュースやひどくなる報道を見てこれは当分帰れないかとも思い、不動産屋に行き妹の住むアパートの隣の空き部屋を借り、それから山形で生活

しています。6人にはちよつと狭いですが、やっぱり家族一緒に暮らせることが一番と思っています。こちらに来てからは、生活の自立のために、昨年4月から働き始めました。夫は現在寒河江市の隣の河北町の農家で、私は家の近くで働いています。おばあちゃんもたまに手伝いに行ったり、草刈りしたり。やっぱり家について座りっぱなしの方が心配だからありがたいです。長男は、こちらの高校で山岳部に入り頑張っていて、楽しそうな様子なので安心しています。震災のとき、浪江小5年生だった次男も、最初は戸惑いもあったようですが、こちらは中学に入学生友だちができ、部活は柔道を始めました。元気に頑張っていて通ってくれています。山形の方は、「山形に住め住め。」と言って気を遣わず親しくしてくれ、近所の方や職場の方もいい方が多いです。浪江町に帰ろうと思っても自分では決められ

ない現状で、早く町の方針が決まればと思います。これから子どもたちもこちらで就職したり結婚したりするかもしれないことを考えると、今はこちらに生活の基盤を置こうと思います。先日NHKの浪江の復興についての特集番組に出たときに、浪江の伝統をどう残すかというテーマで話をし、郷土料理の話し柿、ゆず料理、鮭料理、かぼちゃまんじゅうなどこちらではなかなか食べられない料理も多く、なつかしく思い出しました。また、若い人を集めてそうした浪江の食文化や伝統を引き継ぐような取り組みができればいいねと話になりました。浪江のおばあちゃんたちの知恵を無くすのはもったいないです。ぜひそんな楽しい取り組みがあれば応援したいなと思っています。



池田 信久さん(幾世橋)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：8月10日

子どもたちの笑顔と浪江町の思い出を支えに



▲左から 美智子さん、里奈ちゃん、賢人くん、信久さん、優斗くん

池田信久さん、美智子さんご夫婦は、昨年4月から3人の子どもたちと東京都文京区の職員住宅に住んでいらっしゃいます。生活設計を考える中で、浪江への思いが募ると話してくださいました。

を經由して福島医大近くの避難所へ向かいました。長男の賢人が、病気治療のため医大に長期入院、退院して間もなかったため、感染症などが心配だったからです。4日後、両親が二本松に借りたアパートへ移動しました。当時、次男の優斗は生後1カ月半。ミルクやおむつが足りず、避難所生活の負担も大きかったためか、高熱を出してしまいました。医大も大変な状況でしたが、賢人の主治医にお願いして入院させていただくことができ、本当に

助かりました。今の住まいには、昨年4月6日に避難して来ました。賢人の治療のため、専門医のいる病院の近くに越す必要がありました。私たちは大した情報も得られない中、妻の妹があれこれと手を尽くしてくれ、おかげで文京区の職員住宅に入居することができました。賢人は、今年4月に文京区の小学校に入学しました。長期入院で同年代の子どもたちと遊ぶ機会も少なく、初めての集団生活に馴染めるだろうか、体調を崩さないだろうかと心配したのですが、学校の先生にも、病院の先生にも「思ったよりも大丈夫だったね。」と言ってもらい、ホッとしています。4年生の里奈も、友だちがたくさんできたようで、前より積極的になり頼もしく感じています。

あの震災の日以降、本当に多くの方々に助けていただき、今の私たち家族があります。未だに先のことは何も定まっておらず不安なことだらけですが、感謝の気持ちを忘れず、3人の子どもたちの笑顔、楽しかった浪江町での思い出を支えに、家族のために頑張っていこうと思っています。



山崎 安男さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・阿部
取材日：8月7日

懸命に働くことが、明日の復興につながる

現在、福島市の借上げ住宅にご夫婦で暮らしています。昨年7月に川俣町で会社を再建し、浜通りでの仕事を中心に、忙しい毎日を送っていらっしゃいます。

原発事故は人災かもしれないが、お互いに理解しながら、復興に向けて困難な課題を解決して欲しいとおっしゃっていました。



▲「森林ボランティアを再開したら、また取材に来てくださいね。」と話してくださいました

■従業員とともに、明日を信じて
あの震災発生時は、葛尾村からの帰りでした。ちょっと山に寄り道をしているときで、大したことはないと思っただけですが、山を下ったときに室原の橋が崩れているのを見て、これは大変なことになったと急いで加倉前の会社に戻りました。従業員も次々と戻りましたので、自宅の様子を見に行かせました。午後8時ごろ全員の無事を確認した後、会社に行った妻とともに自宅に戻りましたが、家の中

には入れないほどひどい状態でした。電気も停まっていたので、真つ暗な中、一夜を明かしました。翌12日、午前6時に避難を呼びかける防災無線が聞こえ、夫婦で葛尾村の叔父を頼ろうと家を出しましたが、渋滞のため3、4時間かかってたどり着きました。その後、福島市のいとこや娘のいる栃木県鹿沼に2週間ほど避難をし、現在の福島市の借上げ住宅に住むことになりました。

私は緑化土木の会社を営んでおり、福島市に避難してから約3カ月目の昨年7月19日に、川俣町で事業を再開しました。32名いた従業員のうち、年齢や避難によって退職した者もいましたが、現在、22名が二本松市や福島市、伊達郡桑折町から通って来ています。

私は、自ら働くことによって元の生活を取り戻さなければならぬと思っただけです。従業員にも「今はつらくても頑張ってください。」と声をかけています。また、もともと林業から興じた仕事だったので、浪江町にいたころは、火の用心や不法投棄を防止する看板を立てたりして、山を守る森林ボランティアをしていました。仲間が20名程いますが、この福島や川俣でも、道路のゴミ拾いなどの美化活動をそろそろ始めたいと思っ、声をかけているところです。

私は、この福島で頑張っています。



鴨川 俊郎さん(川添)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・阿部
取材日：8月9日

心安らかに、明日を考えたい

昨年3月末から福島市内の借上げ住宅で奥さまのご両親、息子さんと一緒に暮らしていますが、現在は実父の介護をするため、いわき市の実家で過ごすことが多いそうです。また、奥さまはいわきの病院に勤務されており、家族全員が福島の家で過ごすのは月に1回程度。離れ離れは辛いことですが、それぞれに生きがいをもち、前向きに過ごしているようでした。

■あの日の記憶
昨年3月11日の震災が起きたとき、私は仙台の会議に出席中でした。揺れが収まり、午後5時ごろに泉の会場を車で出て宮城県境を超えたのが午前0時ごろ。何しろものすごい渋滞で、自宅にたどり着いたのが翌日の午前2時か3時でした。地震で崩れた屋根にビニールシートを被せていると、防災無線で避難指示が出ました。とりあえず安全のためかと軽い気持ちで受け止め、両親と息子を連れて身一つで家を出ました。とても寒い日で、両親が途中から毛布を取りに自宅に戻ってしまい、別行動になりましたが、私と息子は福島市へ。義父は自宅で原発の爆発音をはっきり聞いた後、津島の避難所、二本松を経由して福島市へ避難し、約5日ぶりで合流できました。現在の雇用促進住宅には3月末に入居し、今に至っています。が、早い時期に着くことができ、本当に幸いだったと思っています。

■家族それぞれに
義父はカメラが趣味で、浪江にいたころから自分で車を運転して、県内のあちこちに出かけています。
■一番欲しいものは、明日への安心感
これからの私たちの生活設計として、できれば浪江に近いいわき市に家を建てたいと思います。



▲鴨川家のご両親(明次さん、左がモトさん)と、俊郎さん(右)

土地などを探し始めています。町にお願したいことは、これからの生活を決めるのは町民一人ひとりです。安心して次の生活を考え、踏み出せるよう、補償を担保して欲しいと思います。

元の生活に戻れるという安心感さえあれば、明日が見えてきます。若い世代のためにも10年、20年先の浪江町の将来をもっともって考えていただきたいと思っています。



「浪江のころ通信」では、昨年7月の第1号からこれまで、150名の町民の皆さまをご紹介してきました。

「ころ通信」には、以前のふるさと「なみえ」を取り戻すことへのたくさんの願いが込められています。

長期化する避難生活、先が見えないことへの不安、ふるさとへの想い、悩み、前に進んでいく決意・・・など皆さんのさまざまな想いを伝え、それぞれの想いをつないでいくために、これからも全国各地のNPOや大学の皆さんが取材をすすめていきます。

「みんなに元気な姿を見てほしい。」「自分の想いを伝えたい。」など取材をご希望の方はご連絡ください。

..... 連絡先

〒964-0904
福島県二本松市郭内一丁目196-1
福島県男女共生センター内
浪江町役場二本松事務所
「浪江のころ通信」宛
Tel 0243-62-0123
Fax 0243-22-4262



長岡 光広さん(権現堂)

取材者：元気玉プロジェクト 江川
取材日：8月13日

小石饅頭を再び届けたい



▲長岡光広さんと娘さんの美優ちゃん(6歳)、和佳ちゃん(4歳)、結明乃ちゃん(2歳)、奥さんの圭子さん

前向きに事業の再開を行うために日々準備をしています

権現堂の「四季菓匠 長岡家」3代目長岡光広さんご家族。皆さんには「小石饅頭」の製造販売元として有名です。現在は、会津坂下町にご家族5人で住んでいます。
震災以降長岡さんは、家族で郡山のおじさんをたよりに身を寄せました。それから横浜に住みながら東京の会社へ就職。娘さんの幼稚園入園が難しいこと

で、また福島県内に戻ることを決めました。長岡さんが頼ったのは同じお菓子を製造する「太郎庵」の目黒社長です。
「東京でも講演をする目黒社長ならば、自分が仕事にも就けるかもしれない。」連絡後すぐに、「会津坂下にくればいい。」と返事をもらい現在の職場に。現在は、太郎庵の和菓子製造部門で働いています。
「まだ、就職も決まらない人や転職を迫られた人に比べて、自分たちは恵まれています。」と語る光広さん。現在は、3人の娘さんにも友だちができて、奥さんと会津の冬も過ごしました。「米も野菜もおいしい。」と語るのは奥さんの圭子さん。子どもを通じてお母さん方の友だちも増えたと言います。
光広さんの趣味は草野球。浪江に住んでいたころは、内野全般のプレーヤーとして活躍していました。思い出は、何といっても夏の高校野球の県大会で準優勝したこと。双葉高校時代の3年間はとても充実した青春の日々と懐かしがります。
現在は、小石饅頭を再びつく

るための準備をすすめる毎日。「店を出すなら応援するよ。」という目黒社長の言葉にも後押しされています。避難して1年半。浪江のことを忘れたことはありません。遠くふるさとを離れて、もつと情報があれば・・・と思うことも。
「長岡家は浪江の人に支えられてここまでやってきました。お菓子づくりが再び始められるようにがんばっていることが、少しでも伝われば。」と光広さんは話を締めくくってくれました。
3人の娘さんは、笑顔がすてき。この笑顔が今の長岡さんの一番の支えかもしれません。